

2024 年度 南山大学人文学部日本文化学科
卒業論文

方言と若者言葉における新しい形容詞 に関する考察

中山真歩

指導教員

平子達也 准教授

要 旨

新しい形容詞に関する考察

本論文の目的は、従来の形容詞ではない、名詞や形容動詞などを形容詞化した新しい形容詞に関して、それらが形容詞としてどこまで許容されているか、特に方言と若者言葉について明らかにすることである。

中村(2021)は「黄色い」の成立について、井上(1998)は「違う」の形容詞化について、述べており、形容詞化した過程については研究が進んでいた。そして山田(2011)が岐阜県内の形容動詞ならびに名詞の形容詞化について述べた時、それらは、完全な形容詞化というより、活用形ごとにばらつきがあり、語彙的な側面をもつとしている。山田(2011)は「ピンクい」のみ結果が示されていて、他の新しい形容詞に関しては言及されていなかったため、述べていたことが確かかどうかを明らかにする必要がある。

そこで、本論文では、いくつか新しい形容詞を対象とした、活用形に関するアンケート調査を実施し、それらそれぞれの活用形の許容度を問い、新しい形容詞はどこまで定着しているか、山田(2011)の述べていることは確かなのか、を明らかにした。調査の結果、活用形は十分にそろっていなかったが、これからそろっていくと予想されるもの、語彙的な側面だけを残して衰退していくものがあると結論付けたうえで、山田(2011)の述べていたことを裏付ける結果となった。そして、形容詞の活用形のうち、終止形、連体形、連用形(過去形)の定着度が高いことも明らかになり、これらの活用形が新しい形容詞を造る足掛かりになることも示唆された。

目次

1. はじめに	1
2. 先行研究のまとめ	2
2. 1. 形容詞化した言葉.....	2
2. 2. 新しい形容詞の特徴	2
3. 調査について	3
3. 1. 調査方法.....	3
3. 2. 調査結果.....	4
3. 3. 調査結果の考察	6
4. おわりに	7
4. 1. 本論文のまとめ	7
4. 2. 今後の課題	8
【参考文献一覧】	8

1. はじめに

本稿の目的は、今ある形容詞の中で比較的新しくできたであろう、若者言葉や方言などの「新しい形容詞」が、どこまで受け入れられているか、その実態を明らかにするものである。

「若者言葉」は、主に20歳前後の若者たちが日常的に使う言葉である。桑本(2003)は、「若者ことば」の定義を主に三つ挙げている。①使用年齢層は10代後半から20代前半までが中心である、②その語彙はなるべく特定の趣味集団のものに偏らず、年輩の年齢層に使用が浸透している、③意味が知られているものについてはその分類を妨げない、としている。また、定義を試案として挙げた上で、若者ことばに明確な基準を与えることができないままであるため、どんどん修正される必要がある、とも述べている。以下、本文では、桑本(2003)の定義を採用し、呼称を「若者言葉」に統一する。

堀尾(2022)によれば、若者言葉には、既存のルールから外れた活用をすることや、これまでとは異なる造語法を用いることが、特徴として見られるという。例えば、堀尾(2022:62)が述べていた、以下の(1)のような、外来語を派生させた語彙を従来の用法を使用、応用して造られた形容詞が、若者言葉には見られる。

(1) エモい、ラグい、ナウい・・・

このように元は形容詞でないものを形容詞化させる現象は、一部の方言にも現れている。例えば、尾張方言では、以下の(2)のようなものが見られる。

(2) 丈夫い、横着い、ピンクい・・・

これら「新しい形容詞」が形容詞であるなら、活用も本来の形容詞と同じであると予想されるはずだが、そこにはばらつきがある。山田(2011)によると、上記の例に並ぶ「ピンクい」について、「完全な形容詞化が進んでいるというよりは、活用形ごとにばらつきがあり、語彙的な側面をもっている」のだという(山田 2011:64)。同様に、若者言葉の新しい形容詞についても、活用形ごとで許容度などに差がある可能性がある。

そこで、尾張方言と若者言葉、それぞれの新しい形容詞のいくつかについて、活用形ごとに違和感があるかどうかを聞き、新しい形容詞は活用がそろっているかを、尾張方言話者を含んだ10代、20代の大学生を対象に行ったアンケート調査、によって明らかにする。また、その新しい形容詞の活用のあり方において、方言と若者言葉とで差があるかを明らかにする。

本論文の構成は以下のとおりである。まず、2節では先行研究のまとめと、それに伴い、本研究で扱う問題点について整理し、3節では調査の概要を説明し、調査結果を示したうえで、その分析、考察をする。そして最後に、4節で本論文全体のまとめを行う。

2. 先行研究のまとめ

2. 1. 形容詞化した言葉

ここでは、これまで日本語史において起きた、形容詞化について取り上げている先行研究をまとめる。

「黄色い」について、中村(2021)は、純粹に色だけの名称を持つ色、青、赤、黄、白、黒、の 5 つのうち黄だけが形容詞を持たなかったのは、黄が一音節であることが阻んでいたからだという。その背景に、形容詞の語幹が一音節である場合は極めてまれだったことがある。黄は、「黄なり」という形容動詞と、「黄色」という名詞が平安時代のころから現れ、形容動詞化する一方で、形容詞化も期待され、後に他の 4 色と同じように語尾に「い」や「く」をつけるようになっていったという。「黄色い」の場合、形容動詞「黄なり」の方が早くに単語としての定着を見せていたが、色というくくりの中で、一つだけ形容詞を持っていなかった黄を、他と同じように扱うために形容詞化を果たしたと考えられる。

井上(1998)は、動詞「違う」の形容詞化について取り上げる。元々動詞である「違う」は、形容詞の連用形の語尾である「かった」を用いて、「ちがかった」と活用されることがある。井上(1998)によれば、これは、「「違っていた」にあたる過去の継続的状态を、もっと簡潔に表せる」としており、さらに、幼児の言葉の記録でも「ちがかった」という形式が現れることについて、「「違う」の意味が形容詞的なのでカッタを付けてしまうのだろう」と推測している(井上 1998:68)。そして、「違う」の形容詞化においては、形容詞としての他の活用形の言い方も多くなり、「ちがい」という終止形はないものの、「ちげー」を形容詞の俗語の終止形として捉えることができるため、「違う」は現代語形容詞として完成の域に達していると述べていた。このように、形容動詞や名詞の形容詞化が多い中、動詞でも形容詞化を果たすこともあるようだ。

以上で取り上げたものは、今ではほとんど一般化したものだが、「若者言葉」と呼ばれるものの中にはさらに多く、また方言においてもさまざまな形容詞化が見られる。本論文はこれら、方言や若者言葉などの、特定の集団内で使われる新しい形容詞について取り上げている。

2. 2. 新しい形容詞の特徴

新しい形容詞とは、元々名詞や形容動詞などであったものを形容詞化させたもののことをいう。

新形容詞の作り方として、窪園(2002)は語幹の初めの 2 モーラに形容詞の語尾「い」を付ける、ことを挙げているが、モーラ数に関しては、近年ばらつきがあり、短めの語幹であればよいという風潮がある。そして、窪園(2002)は新形容詞の特徴に、「い」を省略して語幹だけで発音されることを挙げている。こうして、新形容詞で語幹だけで発音されることが、

本論文で取り上げたような新しい形容詞を作り出した、とも考えられる。

本論文では、新しい形容詞を扱うが、佐藤(2005)や窪園(2002)によれば、形容詞は造語力に欠けており、その欠陥は形容動詞で補っているとされる。そして佐藤(2005)は合わせて、「形容詞が造語力を失っているのに、近年若者によって活性化されたり、新しく作られたりしていることに注目しておかなければならない」とも述べている。つまり、若者によっていまだ新しい形容詞が作り出されているということは、造語力が回復してきたということが推測される。

また、山田(2011)は、岐阜県内における形容動詞ならびに名詞の形容詞化について言及している。そこでは、「ピンクい」を例として挙げた上で、それら形容動詞ならびに名詞が形容詞化をした新しい形容詞は、「完全な形容詞化というより、活用形ごとにばらつきがあり、語彙的な側面をもつ」としている。さらに「文法に関する新しい方言系の発達は、語形変化体系の獲得である側面と語彙獲得の側面の両面性をもつ」ことも述べている。

本調査では、山田(2011)で取り上げられていた、「ピンクい」の事例を参考に、今ある新しい形容詞の活用形はどこまでそろっているのかを明らかにしていく。形容詞であるならば、活用形は従来の形容詞と同じようにそろっているはずだと、仮説を立てる。併せて、新しい形容詞が見られる方言と若者言葉では、何か違いがあるのかを調査していく。

3. 調査について

3. 1. 調査方法

本調査では、Google フォームを用いて、尾張方言話者を含んだ 10 代、20 代の人を対象にアンケート調査を行った。調査協力者は 49 人、そのうち尾張方言話者は 22 人である。

調査内容としては、新しい形容詞を活用させた例文を提示し、使ったことがあるか、聞いたことがあるか、活用形それぞれの許容度を問うものである。対象となる新しい形容詞、活用形はそれぞれ 7 つとし、以下のとおりである。

<形容詞>

古くからある言葉→「黄色い」

方言→「丈夫い」「横着い」

若者言葉→「ラグい」「エモい」

方言と若者言葉のどちらにも見られるもの→「ピンクい」「みどりい」

<活用形>

例)「黄色い」

未然形 キイロイダロー

否定形 キイロクナイ

連用形 キイロカッタ
連用形 キイロクナル
終止形 キイロイ
連体形 キイロイ○○
假定形 キイロケレバ

対象の形容詞について、古くからある言葉として「黄色い」を取り上げたのは、新しい形容詞を調査することにおいて、何か比較対象を設けた方がいいと判断したためである。「黄色い」は、日本語の形容詞の歴史において、比較的新しいものだったため採用した。そして、方言と若者言葉の新しい形容詞を探している中で、方言と若者言葉のどちらにも見られるものがあつたため、方言、若者言葉とは別で新しく項目を作ることとした。

対象の活用形について、従来の形容詞においても使用頻度が高いもの、加藤(2006:21)が形容詞の活用を、「形式上は「い」「く」「かつ」「けれ」の4種の活用語尾だけでおおよそ網羅できる」と述べていたことから、この4種の活用語尾がついているもの、以上この2つの条件を中心に構成した。

それぞれの形式についての許容度については、「よく使う」「たまに使う」「使わないがよく聞く」「使わないがたまに聞く」「使わないし聞かない」の5つから選択する形をとった。

3. 2. 調査結果

調査結果の細かい考察を行う前に、まず調査結果の全体像について軽くまとめておく。

対象にした形容詞のうち、方言の「丈夫い」「横着い」は、尾張方言話者の回答のみまとめており、方言と若者言葉のどちらにも見られるものの「ピンクい」「みどりい」は、全体の結果と尾張方言話者の回答のみをまとめた結果を、それぞれ出している。

すでに形容詞としてほとんど定着している「黄色い」においては、従来でも使用頻度が低いとされる活用形「～だろう」「～ければ」以外、「よく使う」「たまに使う」の割合が約8割以上であるため、活用がそろっているといえよう。(→図1)そのほかの形容詞においては、山田(2011)が述べていた通り、活用形ごとにばらつきがある結果となった。(→図2～9)

形容詞ごとで比較した結果、どの形容詞でも、終止形「～い」、連体形「～い○○」、連用形(過去形)「～かった」の許容度が、他の活用形と比べて相対的に高いことが明らかになった。

方言と若者言葉の活用形のありかたの違いとしては、方言の方が活用形ごとのばらつきが見られ、若者言葉の方では、あまりばらつきが見られないように思えた。(→図2～5)

そして、「ピンクい」と「みどりい」については、方言と若者言葉のどちらでも分析を行ったが、若干、方言として定着しているような結果となった。また、活用形ごとのばらつきにおいて、あまり差はなかった。

図1 「黄色い」の活用

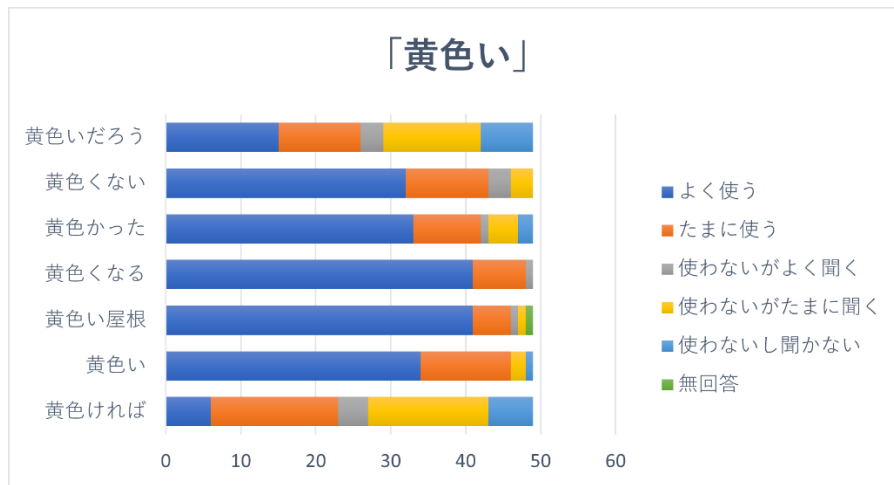


図2 「丈夫い」の活用

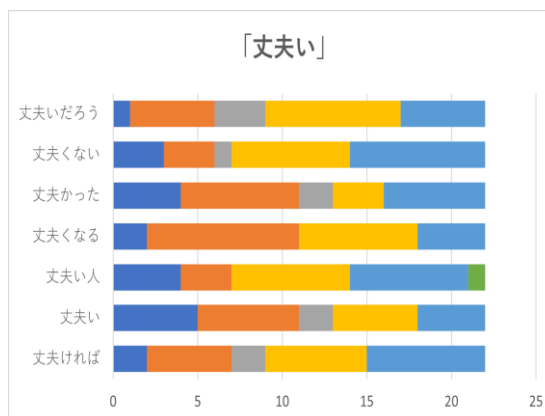


図3 「横着い」の活用

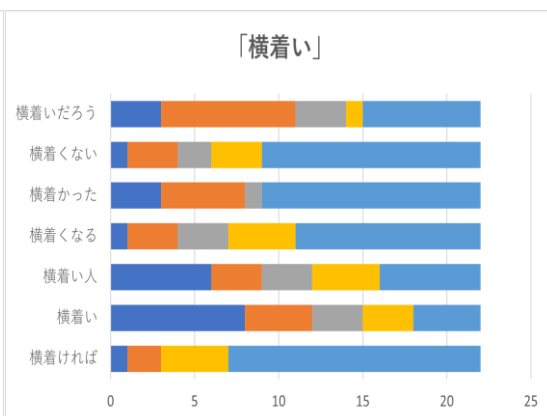


図4 「ラグい」の活用

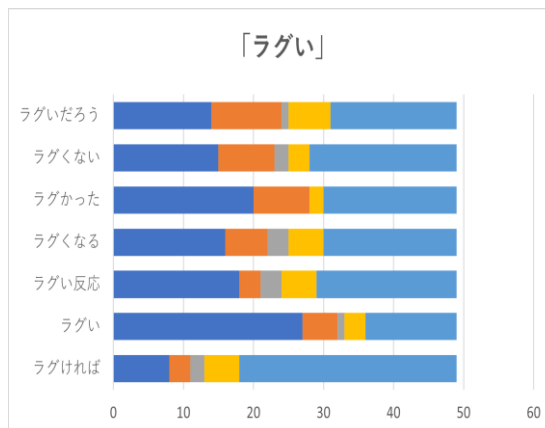


図5 「エモい」の活用

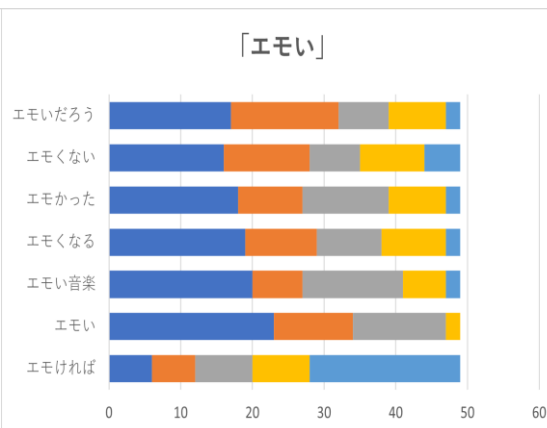


図6 「ピンクい(若者言葉)」の活用

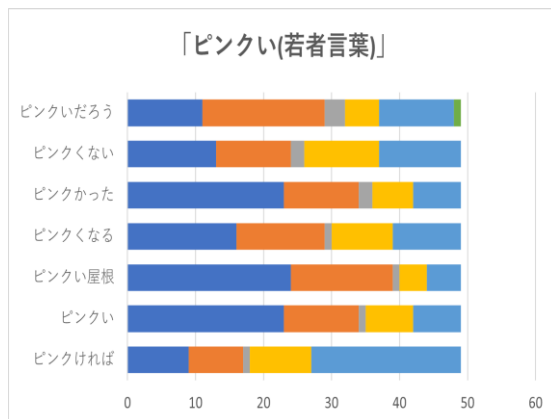


図7 「みどりい(若者言葉)」の活用

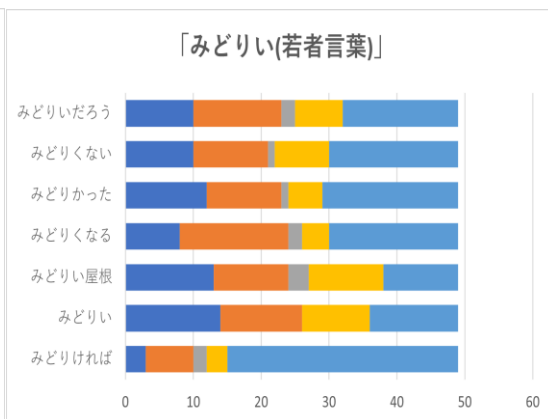


図8 「ピンクい(方言)」の活用

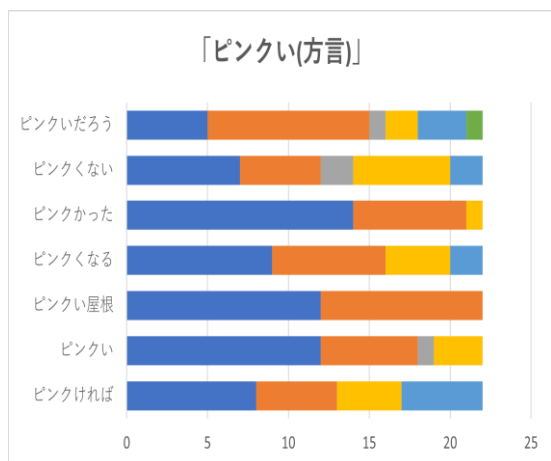
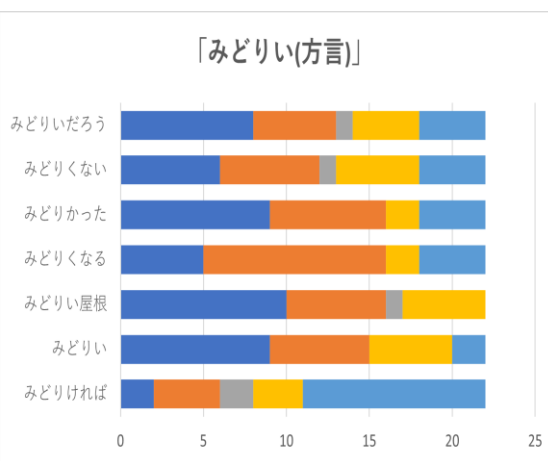


図9 「みどりい(方言)」の活用



3. 3. 調査結果の考察

調査した結果、新しい形容詞は活用形が十分にそろっているわけではなく、冒頭で挙げていた、新しい形容詞も従来の形容詞と同じ形容詞であるならば、活用形はそろっているはずだという仮説は成立しなかった。

しかし、形容詞ごとに活用形の許容度を比べてみた結果、新しい形容詞の活用形がどうできてきたのか、どう変化していくのかにおいて、傾向が見られる。それは、新しい形容詞の活用は最初まんべんなくそろうが、その後、それぞれの形容詞の意味や性質によって、活用形の定着が左右され、活用形ごとにばらつきが出てくる、というものだ。

新しい形容詞の中でも、方言をより古いもの、若者言葉をより新しいものとしたとき、方言の新しい形容詞はある程度変化を遂げた状態、若者言葉の新しい形容詞はまだ作られて

間もないまだ歴史の浅い状態、と捉えることができる。そこで方言の新しい形容詞の活用(→図 2,3)と、若者言葉の新しい形容詞の活用(→図 4,5)を比べると、ばらつきの差が見て取れるだろう。

これは、山田(2011)で述べられていた、「文法に関する新しい方言系の発達は、語形変化体系の獲得である側面と語彙獲得の側面の両面性をもつ」という特徴が、広く新しい形容詞の発達においても同じことが言える、ということを表しているように思う。若者言葉の新しい形容詞の活用がまんべんなく使われているのは、語形変化体系の獲得の側面が強く出た結果なのではないだろうか。もちろん、それぞれの形容詞の意味や性質によって、個体差はあるだろう。

許容度が活用形ごとにばらつきがあるのが明らかになったうえで、形容詞ごとに比較した結果、終止形「～い」、連体形「～い○○」、連用形(過去形)「～かった」の許容度が、他の活用形と比べて相対的に高い、という興味深い結果になった。この結果から考えられるのは、これらの活用形が形容詞において定着しやすい活用形であるということである。また、この結果から、これらの活用形を用いた形から新しい形容詞は造られているという仮説が立てられる。井上(1998)によって述べられた「違う」の形容詞化においても、連用形(過去形)「ちがかった」から形容詞化が進んだ可能性があることから、この説は有力だと考えられる。しかし、この仮説に関して、今回は通時的な調査ではないため、今後十分に真偽を確かめる必要がある。

そして、方言、若者言葉といったように分けたグループの中でも、活用の許容度に差があったことから、新しい形容詞においての活用は、その形容詞の定着の度合いによって左右されるものであり、定着の度合いが高いと、「黄色い」のように形容詞として一般化し、低いと、語彙的な側面が強くなり、活用形までをひとくくりとした形で残っていくに違いない。

本調査は、結果的に山田(2011)で述べられていた内容を改めて確認する形になった。

4. おわりに

4. 1. 本論文のまとめ

本調査で対象にした新しい形容詞は、現段階では活用が十分にそろっていなかったが、「黄色い」のように、時を経て活用がそろっていくと予想されるもの、語彙的な側面を残して衰退していくものがあると結論付けた。また、終止形、連体形、連用形(過去形)の許容度の割合が他の活用形と比べて相対的に高かったことから、これらの活用形が形容詞において定着しやすい活用形であり、これらの活用形を用いた形から新しい形容詞が造られていることが示唆された。そして、真田編(2011)の述べていたことを本調査で裏付ける形となり、新しい形容詞は、「完全な形容詞化というより、活用形ごとにばらつきがあり語彙的な側面をもつ」ことがより鮮明になった。

4. 2. 今後の課題

本調査では、アンケート調査協力者を10代、20代に限定した共時的な調査になっていたため、現在の生きた形容詞はとらえることができたように思うが、活用の変化を調べるにあたって、通時的な調査の方が、より濃密な結果が手に入ると考えられる。そのため、今後調査するときは、対象者の年齢層を広げる、もしくは数年ごとに調査を行う形が望まれる。そして、今回の考察で示した、新しい形容詞は定着しやすい活用形を用いて造られる、という仮説の真偽を確かめるためにも、これから造られる新しい形容詞の動向にも期待したい。

【参考文献一覧】

- 井上史雄(1998)『日本語ウォッチング』岩波書店
加藤重広(2006)『日本語文法入門ハンドブック』研究社
窪蘭晴夫(2002)『<もっと知りたい！日本語>新語はこうして作られる』岩波書店
桑本裕二(2003)「若者ことばの発生と定着について」『秋田工業高等専門学校研究紀要』38、113 - 120、秋田工業高等専門学校
佐藤武義(2005)『概説現代日本のことば』朝倉書店
中村幸弘(2021)『日本語の形容詞たち』右文書院
堀尾佳以(2022)『若者言葉の研究：SNS時代の言語変化』九州大学出版会
山田敏弘(2011)「中部地方」『日本語ライブラリー方言学』p.56-73, 朝倉書店